堕ちていく白百合Ⅳ 前編

K

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19616435

R-18, 守エク霊, エク霊, 18禁, エクボ, モ腐サイコ100, ♡喘ぎ, 霊幻受け

EntsCat様（user/11852202）とリレーエロ小説作りました！
やっほーい！！
今後も続きますので、ぜひ読んでいってくださいね！
エンツさんの所でもお読みいただけます！

そしてひよたまさん（user/39563383）からめっちゃ素敵なファンアートいただきましたぁぁ！（掲載許可済）
ありがとおおお！！

【堕ちていく白百合】とらのあなで通販中です！
文庫本/416P/R18
pixiv掲載本編＋溶けない愛蜜糖＋書下ろし３編収録
ご興味のある方は下記URLよりどうぞ！
https://ec.toranoana.jp/joshi_r/ec/item/040031175393

各種捏造設定含みます。
設定＞良家に嫁いだ元・霊とか相談所所長のあらたたさんが夫を突然死で亡くして未亡人に！
悲しみに暮れてたところに分家に手篭めにされそうになったけれども、エクボに助けられてついに恋に堕ちた。
一方、その頃の影山茂夫。相談所が無くなってからあらたたがいなくなって寂しかったところに、あらたたから連絡が入る。久しぶりの「師匠」との再会に心躍る茂夫。再会後に茂夫は思考を巡らせ、ある決断をする…。

和装×生肌×仏壇×背徳感×大和撫子×兄嫁NTRの特盛大サービスのエロでございます。

登場人物
霊幻新隆＞良家の奥様。28歳。最愛の旦那を突然死で亡くし未亡人に。和装女装美人。良家の奥様らしく言葉遣いはお上品に。
九下部笑窪（エクボ）＞誠司の弟。35歳。道楽息子で兄と比較されて誠司に嫉妬している。霊幻を手籠にする係（えっ）
九下部誠司（モブキャラ）＞霊幻の最愛の旦那様。逝去済み。思い出程度に出てきます。

以下内容がふんだんに織り込まれておりますので、閲覧の際はご注意ください。
霊幻がめっちゃ奥様（だけども今回は師匠み強め）
霊幻が美人（美丈夫か）
霊幻が常に和装女装で浴衣も女物着ていてしかも白無垢もだ（でも今回も男物も着てます）
♡喘ぎあります！
エクボが本家の次男坊で俺様だ！

上記ご参照の上、お読みくださりますと幸いです。

Table of Contents

堕ちていく白百合Ⅳ 前編

※※※Ｋパート※※※

その日一日の課程を終えて、終業のチャイムが鳴り響く。
夕方前の少し白んだ青空が窓から見えて、生徒たちがガタガタと音を立てて、足早に部活や各々の用事のために教室を後にしていく。
教室に一人ぽつねんと取り残された影山茂夫は、さらりと黒髪を揺らして、手元の携帯電話をぱくりと開いた。
「・・・・・・」
やっぱり、こない。
メールも、着信も、一時期苛つくほどにうるさかった連絡がぱったりと途絶え、静まり返る携帯電話。学校終わりには頻度高く呼び出しを喰らい、除霊のバイトをこなし、食事を一緒に楽しんだ記憶が脳を駆け抜ける。
小学生の頃から通っていた、相談所。そこにいつも当たり前にいてくれた、霊幻新隆。
今は所長が事務所をたたみ、顧客だった名家の跡取りと婚姻を結び、いつしか超能力とは無縁の世界へと手足を取られ、あっという間に自分の前から姿を消してしまった、人生の師。
いつでも連絡してこいよと少し寂しげに言っていた彼に、逆に連絡はくれないのかと聞いたらはにかんで「また急に呼び出してもいいのかよ」と揶揄うように言われた記憶はもう遠い。
あれからどれだけ経っただろうか。
成長したなと頭を撫でられ、お前はもう俺がいなくても大丈夫だと太鼓判を押されて、自分自身との折り合いも少しずつ学びながら前に一歩踏み出した。
まだまだ不安なことも自信のないことも山ほどあれど、彼がいつでも相談所にいるという不動の安心感が茂夫の背中を支え、力強く押してくれていた。また軽口を叩きたくなった時、顔を見たくなった時、相談したくなった時、不安になった時。あの扉を叩いて、めんどくさそうに声をかけてもらえたら、と思っていた。

画面を見ながら小さくため息をついて、ほんの少し感傷に浸っていた。
あぁ、また会いたいなと、律が聞いたらイラついてしまいそうな思いをぼんやりと抱えながら、ボタンを操作して以前のメールのやり取りを振り返る。
なんでもないような会話、飯食おうなどの単純明快な連絡事項、バイトの打ち合わせ、おやすみと労う優しい心遣い。思い返せば、はちゃめちゃなようでいてとても気配りをされていたんだと改めてありがたく感じるのだった。
そんな時だった。不意に鳴る覚えのある着信音。光る画面。
茂夫は目を疑った。
「えっ・・・？！」
画面には、「霊幻師匠」の表示。うっかり超能力が発動してしまったのかと思ったが、違うようだ。あたふたとしながらも震える指で、通話ボタンをかちりと押す。
「・・・はい」
「よお、モブ。元気にしてたか？」
カラカラと笑う、いちばん耳に欲しかった声。鼓膜を打つ軽快な、それでいてじんわりと馴染んでいく懐かしい響き。思わず涙が出そうになって、ぐっと堪えて、跳ねる心臓を服の上からぎゅっと拳を握って押さえ付ける。
「師匠！お久しぶりです」
「おう。元気してる？」
「はい。師匠は？」
「俺はいつも通りだよ」
乾いた笑い声が聞こえて、とても懐かしくて嬉しいのに、ほんの少し違和感を感じてしまう。どうしたのだろう。記憶の向こう側に残る彼の声はもっと、なんというか弾むように高かったはずだ。それが軽すぎて重みがなく、声から少し力が抜けたような感覚がした。
「本当にお久しぶりですね。どうしたんですか？」
「いやぁ、ずっと連絡とってなかったなと思ってさ。話したくなって」
驚かせてごめんな、と茂夫の耳に彼が声を届けてくる。

「急に電話してごめんな。今ヒマ？」
「あ、はい。ちょうど学校も終わって、帰ろうかと思ってて」
「そうなのか。いま塩中の近くに来てるからさ、会える？」
茂夫の胸が嬉しさで高揚して沸き立つ。以前と変わらない急な呼び出しに心が躍った。ガタンと音を立てて立ち上がって、茂夫は通学鞄のファスナーをキュッと閉める。
「はい」

茂夫は学校を出て、指定された大通り沿いの大手チェーンカフェへ足を運ぶ。そこは新隆がまだ相談所を運営していた時に、茂夫や芹沢とよくコーヒーやドリンクを嗜むために訪れていた場所で、思い出深い。そこを待ち合わせ場所に選ばれたことを粋だなとも思ってしまう。
到着してガラス張りの店をそっと覗き込めば、見覚えのある蜜色の頭がホットコーヒーを口に運んで、ちょうど火傷をして顔を顰めているところだった。
あぁ、本物だ、夢じゃなかった。
「師匠」
声をかけると、それに気づいて顔が上がる。二重のくっきりとした大きな半目、すっと通った鼻筋、薄い唇。あの頃と違うのは、寝不足とストレスからきていたであろう目の下の灰色のくまと、少し精気をなくしたような青白さが消えていることだ。今の新隆はほんのりと顔が色づき、以前よりも目に光が宿って生きていることを感じられる。というよりも。
「お久しぶりです。少しセクシーになりました？」
「おいおいモブ君よ、いくら俺がイケメンだからって久しぶりの挨拶がそれなわけ？」
大袈裟にあーあ、とため息をついて、吹き出す新隆。正面向かいの椅子に座るよう茂夫を促し、メニューを差し出す。
「奢ってやるから好きなの頼めよ。腹減ってるならセットとかもいいぞ」
「ありがとうございます」
茂夫はメニューを繰りながら、新隆を見る。

「師匠」
「ん？」
「お嫁に行ったんだと聞いてたんですけど、格好は男の人なんですね」
「バッカ！あんまでかい声でそういうこと言うな！」
周りの目を気にしながら真っ赤になって慌てる新隆の服装は、銀鼠色の駒絽の長着に同色駒絽の羽織を合わせ、羽織紐には明るい茶色の猫目石があしらわれて重く揺れ、渋紙色の角帯で着物を戒めていた。その帯には、ちょうど羽織が翻ってチラリと覗く位置に、燻銀のように渋く煌めく白百合を刻まれた帯飾りが射しこまれている。そして左手薬指に鈍く光る結婚指輪が、既婚者であることを周囲に無言で知らせているのだった。夏向けにとTPO考慮の上でなるべく暑苦しくない色合いで着付けをしたつもりの新隆だったが、彼の白肌と相まって、また街中のために目立ってしまうのは無自覚だ。対する茂夫は夏服で、薄手の半袖ワイシャツに黒の制服スラックス。歩いてきたのと外気温のせいか、少し汗ばんで前髪が額に張り付いている。
カフェオレとサンドイッチのセットを頼んでから、茂夫はようやく大きなメニューをパタンと閉じて、新隆に向き直る。
「師匠、本当になんというか・・・えっちになりましたね」
「あのさぁ、それ褒めてんの？」
クスクスと笑いながらマグを口に運ぶ手はしなやかだ。袖からのぞく華奢で骨ばった手首がまるで小首を傾げる乙女のように可憐に見えて、そこにきらりと光る指輪がうっとおしく感じてしまうくらいだ。
「でもどう言ったらいいのか、あんまり元気じゃなさそうです」
「そう？」
ぐ、とマグを掴んでいた指先が震える。鋭い指摘にほんの一瞬だが、思わず身体が硬直した。
「久しぶりに電話がきて、師匠の声を聞いて嬉しかったんだ。でもなんか違った」
「いやあのそれは久しぶり過ぎて忘れたんだろ人間の記憶なんていくらでも上書き可能でいい方に思い出を書き換えたりとか」

「何かあったんですね」
ズバリと当てられていよいよ冷や汗が出てきてしまう。漆黒の瞳がじっと、新隆を見つめてくる。その瞳に不覚にも懐かしさを感じてしまい、鼻の奥にツンと痛みが生じた。
そうだ、この少年にはもう嘘は必要ないというか、嘘で固めてはいけないんだったと思い出す。本当は言うつもりなど無くて幸せだと報告して、少しお茶してすぐに別れるつもりだったのだ。なぜ悟られたんだろうかとつい考えてしまう。
はぁ、と少し大袈裟にため息をついて肩を落とす。困ったように笑うことでしか誤魔化せない内容だけに、あの頃に顔面に貼り付けていた営業スマイルをまた取り戻したくなってしまった。
「ははは。いやぁなに、誠司な、死んじゃったんだ事故で」
「え・・・っ」
さらりと新隆の口から飛び出す衝撃的な事実に固まる茂夫。そのタイミングでカフェオレとサンドイッチが運ばれてきて、無機質なかちゃりとした音が嫌に耳に響いた。
茂夫も何度かバイト中に会ったのことのあった、身綺麗な男性だった。その様相は聡明で人好きをし、茂夫も緊張なく会話ができるほどの明るい雰囲気を放っていたと記憶している。この人なら霊幻新隆を幸せにしてくれるかもしれないと心のどこかで安堵していたのと同時に、母親を弟に取られた長男坊のように少しいじけてしまってもいた。
「う、そ、じゃない、んですね」
「嘘で旦那を殺してたらやべぇよ」
からりと笑う新隆に茂夫は居た堪れなくなって、サンドイッチに手を伸ばしてかぶりつく。よく冷えたしっとりとしたパンが指先をじんわりと冷やして、次の言葉を考える思考力を奪っていく。
「え、と・・・ご、愁傷、さま・・・です・・・？」
「おお、ありがとうな。気ぃ使わせてごめんな」
ことり、とマグをテーブルに静かに置いて、新隆が苦笑する。
「もう落ち着いたしな、今はこうして元気だぞ」
「そうなんですね。なら、良かったですけど」
カフェオレでサンドイッチを飲みくだしながら、茂夫はふと疑問に

思ったことを口に出してしまう。
「師匠はこれからどうするんですか？」
「え」
「相談所、もうやらないんですか？」
「・・・ああ、それなぁ」
宙を目で仰いで唇に指を当てて考える仕草。久しぶりに見るその癖は、やはり茂夫の知るあの霊幻新隆で、心に染みるものがある。
「僕は・・・師匠のいない日常が、寂しい、です」
「え、お前友達いなかったっけ」
肉改部とかいたよな？と当時の記憶を頼りに新隆がコーヒーを啜りながら言う。
「いますけど、そうじゃなくて」
「うん？」
「師匠は・・・霊幻師匠は、あんたしかいないから」
きゅうと唇を噛み締めて、茂夫はまた新隆を見つめる。幼さの残るその柔らかな頬を真剣に強張らせて、必死に伝えようとする様子が健気だ。そんな表情にまた成長したなと感じながら、子供の成長は本当に早いと痛感する年寄りじみた自分を感じて、顔に出さないながらも脳内で自分を笑う。
「戻ってきてください、師匠」
真剣な目が新隆を刺す。前髪から覗くその瞳は、本当に懐かしいそれだった。
「残念だがそれは無理な話だ、モブ。すまん」
新隆もこの気迫には相応の態度で返す礼儀として、マグをまた置いて真顔で向き合う。冷めかけたブラックコーヒーの香りがふわりと鼻先をくすぐった。
「俺はもう、九下部家本家の人間なんだ。こないだそれをよく理解しないまま外出をして、どえらい目に遭ったよ」
「だって、今はもう」
「事実としてはそうだ。でも俺はもうモブの知る俺じゃなくなってしまったんだよ。隙あらば大人たちが俺を捕まえてどうにかしようとしてくる」
現実問題として、と新隆はエクボから聞かされた内情をものすごく

かいつまんで、茂夫に理解できるように説明していく。実際に新隆も知り得なかった事を教えてもらい、自分がどういう立場にいるのかを思い知らされることにはなったのだから、これは引いては茂夫を守るためでもあるのだ。まあそこは言わないが。
「大人ってのは裏側にたくさんの嘘や闇を抱えて生きてるもんだ。だからさ、俺みたいになるなよ」
「そんな」
「俺みたいに囚われて動けなくなったら、楽しくないだろ？」
な？と手が伸びて、茂夫の頭をぽふんと撫でる。
「あ、でも勘違いすんなよ？俺は誠司と一緒にいられたことを後悔してないし、今も幸せなんだからな」
「そ、う、ですか・・・」
ニッと笑って、温かな手で頭を撫でてくれるのが心地よい。その温もりがもうほんの数分でまた、遠くへ行ってしまう。
──あぁ、また、一緒にいられないだろうか。
「ねえ師匠、また、こうして会ってくれますか」
茂夫は縋るようにテーブルに身体を乗り出す。
「僕はまた師匠とお喋りがしたいです」
「モブ・・・」
最初は目を丸くしていた新隆も、目を細めてふんわりと笑う。こんなに慕われて流石に悪い気はしないというものだ。それに元々師弟としてコンビを組んで色々やってきたのだし。
「あぁ、いいよ。俺もモブと話したいこと、たくさんあるし」
その表情は、相談所時代の新隆とは雰囲気を変えて、茂夫にすら感じられるような濃密な色香を漂わせる。脳に直接響く本能で感じる甘い概念が、ヒリヒリと茂夫の神経を撫でていくようだった。それが雌のものであるなんて、青い茂夫にはまだ理解ができない。思わず茂夫の喉がごくり、と鳴った。
「モブ？」
ぼうっと惚ける茂夫を新隆が不思議そうに見やる。慌てて茂夫は失敬と返事をして、残りのサンドイッチを口に放り込んでカフェオレを飲み干した。その様子は妙に慌てており、忙しかった。

帰り道、茂夫は新隆の様相を鮮明に思い返していた。それは家に辿り着いても、母親から夕飯の呼び声がかかっても、全く耳に入らないほどに回想を繰り返す。律が呼びにきてようやく我に返って夕餉に向かうも、ぼうっとしたまま箸が進まない。父親からツボミちゃんのことか？と揶揄われて顔を真っ赤にして、慌ててハンバーグを掻き込む。
茂夫はひたすら、霊幻新隆の事を考えていた。どうやったらあの九下部の檻から解放してやれるだろうかと、そればかりをぐるぐると思考を巡らせる。だが14歳の世間の一般常識を欠いた知識不足の頭では、考えられることなど稚拙なものに過ぎなくて、結局は疲れて寝てしまう。
だが、彼には他の人間とは明らかに違うことが一つある。
超能力者である、ということだった。

茂夫はそれから定期的に新隆と連絡を取り合い、カフェでのんびりと話したり調味市内を散歩したり、懐かしいなと語らいながらかつてのラーメン屋で夕餉を共にしたりした。そして数回の遊びを重ねたのちの、ある日のことだった。
それは唐突に発生した。

昼下がり、新隆がエクボの部屋で法的な書類の取りまとめを行なって、確認作業に追われている時だった。
「え、エクボさん・・・ちょっと近いんですけど」
「いいじゃねぇか、俺様にはその気は全くないぜ」
万年筆を取る白い手に無骨な指をそろりと這わせて、ニヤニヤと笑いながら人差し指の股をこそこそとくすぐる。
「ここはな、これをここに書くんだ」
そう耳元で囁きながら、空いた手を胸元の合わせからするりと侵入させて、乳首を柔らかく摘んでくるエクボ。
「あッ！ば、かっだめ！」
ひくりと肩が震えて、その衝撃で纏う白百合の香りがほわりと匂い立つ。乳首への刺激に紙を滑らせていた万年筆が遊び、不要な線が混じって書き損じてしまう。

「おやおやぁ？真面目にやらねぇといくら時間があっても足りねェじゃねぇかァ？」
「やめて・・・いじらないで・・・ァんっ・・・」
「何をどう弄らないでほしい？言えよ」
羞恥で顔を真っ赤にして、万年筆を握る手にぎゅうっと力がこもるのがわかる。一際白百合の香りが立つうなじに舌をペロリとと這わせると、ビクンと痙攣するのがわかった。
「あ、やっ・・・ちく、び、そんなコリコリしないで・・・ァはっ！」
言い終えると同時に、きゅうっと摘み上げられて甲高く甘い悲鳴が出てしまう。いやだと頭を弱々しく振る新隆にエクボが調子に乗って、耳を舐めながら手は止めない。このままではただでさえ弱い乳首への刺激で本気モードに突入してしまうと危惧して、脳みそが浮かされ始めたその時だった。
「若奥様。こちらにいらっしゃいますか」
「！！！！！！」
襖をトントン、と軽くノックをする音が聞こえて、からりと勝手に開かれる。新隆はがばっとエクボから離れて襖に背を向けて、乱れた胸の合わせを一生懸命手で握って取り繕う。
「馬鹿野郎！主人の許可なく襖を開けるんじゃねぇ！」
エクボの焦る怒号が飛んで、若いお手伝いがはっとした顔をして申し訳ありませんと必死に詫びを入れてくる。そして。
「お忙しい中失礼致します。若奥様へお客様がいらしてまして、玄関でお待ちでいらっしゃいます」
「・・・え？私に、ですか？」
驚きと緊張で早鐘を打つ心臓を抑えながら、必死に平常心を装って返事をする。だが来客の予定はまるでない。
「はい、その方、影山茂夫様と名乗られまして、どうしても若奥様と話がしたい、でも上がって待つのは嫌だから玄関で待つ、とおっしゃいましてどうしたら良いか」
「モブ？！」
新隆は着物を整えて立ち上がり、あとは大丈夫ですとお手伝いに言って、エクボの部屋を後にする。茂夫が来るなどとはもちろん聞

いていないから、エクボがあつらえた白大島紬の女物の着物と湊鼠色の羽織で玄関に向かう。この際この装いで驚かれても着替えている時間などない。まずは玄関で待っているという茂夫に顔を出すことが最優先で、驚かれても仕方ないと考えていた。
広い玄関へと辿り着けば、茂夫がそこに立っており、新隆の装いを見て少し目を見開いて、予想通り驚いた顔を見せた。
「師匠！」
「モブ！お前ここ教えてないのになんで」
「すみません・・・師匠の気配を追ってきたので」
「あー・・・」
そういえば茂夫は超能力者だったと自分にとって当たり前の事実を思い出しながら、たたきに降りて草履をはき、茂夫の肩を掴んでその目を見下ろす。
「わざわざ来てくれたのかモブ・・・。今日学校は？」
「休みです。そうじゃなければ来ません」
至極当然の正論を突きつけられて、新隆は苦笑する。まあ確かにと相槌を打って上がるように促すが、茂夫は首を横に振って頑なだ。
「お茶ぐらい出すのに・・・そんなに上がるのが嫌なら外で話すか？」
「はい、その方がいいです」
豪奢な引き戸の先の庭へ連れ出そうと手を引き、戸を開ける。隙間から光がキラキラと煌めいている様子が見えて、影を落とした家屋とのコントラストが目に痛い。
「分かった」
その言葉に誘われるかのように、外に出た。降り注ぐ白い太陽光が目に眩しくて、思わず手をかざして空を仰ぐ。その瞬間、かざした手を引かれ、宙に足が浮いた。
「え」
つっかけ程度にしか履いていなかった草履が片方脱げて、出隅の石畳の上にたん、と落ちる。
「ちょ、モブ？！降ろせ！」
「嫌です。今日はあんたを連れ戻しにきたので」

「はぁ？！」
新隆は思考が追いつかず、茂夫の逆立つ髪の毛でその心理状態を少なからず興奮しているのだと悟る。だが自分が浮いており、茂夫が手を離したら確実にタダでは済まない状況で聡い頭が回らない。
そのまま茂夫に導かれるに任せ、新隆は羽織や着物の裾をひらりひらりとはためかせて、手を引かれて風のように飛んでいってしまった。

ギャイギャイと騒々しいのを聞きつけて、面倒くささそうにエクボが自室から顔を出す。
「おい、一体なんの騒ぎだこら、って・・・なんだ？！」
玄関での騒ぎを聞きつけてエクボがやってくる。そこには二人の姿はなく、代わりに少年と少年に手を引かれる新隆が、ふわりと空を飛んでいるという信じられない状況に釘付けになってしまう。呆気に取られたエクボがゆっくりと視線を動かすと、すぐ間近の石畳の上に、片方だけの月白色の草履が転がっているのが見えた。
玄関から見える外は光に溢れていて、その草履も太陽光を浴びてきらりと輝いている。
「・・・は？またあいつ・・・」

攫われた？

エクボは一瞬の出来事に頭が回らず、その場に呆けて、立ち尽くした。

※※※EntsCatパート※※※

新隆の目に映る九下部の家が、どんどん小さくなる。
「……あんなにちっぽけな家の中で、俺はこの世の終わりみたいに苦しんでたのか」
新隆は可笑しくなってきた。
茂夫はぐんぐん高度を上げて、新隆に太陽で光り輝く海を見せてく

れる。
「綺麗だな……」
「師匠、外の世界はこんなに自由で、綺麗ですよ」
囁くように話すのに、不思議と茂夫の声ははっきりと新隆の耳に届く。
「芹沢さんや律、花沢くんと相談して、僕達なら悪い大人から師匠を、守れる、って結論になったんです」
「モブ……」
茂夫はチラッと着物を羽根のようにはためかせる新隆を見て、さっと視線を逸らす。新隆がうっすらと施した化粧が妙に『男』を刺激する。本当に師は目の毒な姿に変容したものだ。
「師匠、前より随分痩せましたよね。何かつらいこと、『続いてる』んじゃないですか」
「……！！」
茂夫には話していなかったエクボとの爛れた関係のことを、間接的に指摘されて、新隆は狼狽えてしまう。
その姿は肯定になってしまった。
「やっぱり……ねぇ師匠、『嫌なことからは逃げてもいい』んでしょう？」
「それは……」
いいのだろうか、と新隆は自問する。
誠司とエクボ、どちらも選べないのなら。
その選択から、逃げてもいいのだろうか、と。自分に問いかける。
「……いいのかもしれないな」
新隆は自分の左手を引く茂夫の手に、右手も重ねた。

※

「影山茂夫ってのは何者だ」
一方、九下部家。
とうとう寝込んでしまった当主夫人を他所に、当主とエクボは冷静に話し合いをしていた。
「あいつがやっていた事務所のバイトだったと思う」

「ああ、あの怪しい霊能事務所の」
「本物の超能力者使ってたのなら、新隆も本物だったんだな。驚れぇたわ」
すぅっと冷たく当主は目を細める。
「ああ言う人間は一定数産まれる。が、少数派で社会的に失敗しやすい。取るにたらん連中だ」
「それに本家の人間攫われてりゃ世話ねぇよ……」
む、と当主は一瞬押し黙る。
「……おおかた金が目当てだろう。旧知の仲だと言うなら悪くは扱わないだろうし、端金を与えてさっさと新隆を返して貰ってから、社会的な制裁を加えればいい」
エクボは眉を顰める。
「ちょっと甘くなったんじゃねぇか、親父」
「新隆の身の安全を守るのはもはやお前の仕事だろう、笑窪。新隆はもうお前のものなんだろう？……最近激しすぎるんじゃないのか、部屋の前を通り掛かれば声が丸聞こえだぞ」
「……！！言ってくれよそう言うことは！」
「世間体が悪いから、妾にするならするでさっさと発表しろ。いい加減九下部本家以外にも兄嫁に手を出してることがバレるぞ。離れを使わせてやるから、腹決めろ」
きゅ、とエクボは唇を噛む。
「言ったろ。妾にはしねぇ。……妻にする」
はぁ、と当主は呆れたように息を吐いた。
「本当にお前は頭が悪いな」
『エクボは本当に頭が良いんだな』
当主の悪言を、エクボの中で新隆の感心するような声が上書きしていく。
「言ってろよ、古狸め。もうろくしたなら俺様に任せてろ。……新隆の探索には俺様の手のものを使う。警察にも協力させるからな」
かけがえのない心の支えになりつつある新隆のために、エクボはよりしたたかに、賢く恐ろしく変貌しようとしていた。
エクボは新隆を娶った時から豹変した兄のことを思い出していた。
どこか頼りないお坊ちゃんだった兄は、新隆を手に入れてから狡猾

で油断ならない男に変わった。当時はその変わりように驚いたものだったが、皮肉なことに何一つ分かり合えなかった兄のことが、こと新隆関連だとエクボは痛いほど理解できるのだった。
あの底抜けに優しい魅力的なお人好しを守るためには、誠実な唯の金持ちでは駄目なのだ。
宝物を護る龍虎のように変化しなくてはならない。
「まずは信頼できる分家の連中に――」
エクボが取り出したスマホに、電話がかかってきて取り落としそうになる。
非通知。
「……九下部 笑窪だ」
緊張しながらも、スマホの録音アプリを起動してからエクボは電話に出る。
『……エクボ？』
「新隆っ！」
九下部の家に緊張が走る。
「無事なのか、無事なら咳払いをしてくれ。そうじゃないなら病院を手配しておくから――」
『エクボ。……脅されて電話してるとか、そういうんじゃねえんだ。これは俺の意思で電話してる。ごめんな、携帯も持たずに出たから、公衆電話からで驚いただろ』
穏やかな新隆の声に、エクボには嫌な予感が這い上がってくる。
『これまで迷惑かけたな』
「何、何言ってんだ」
『俺の優柔不断な態度が九下部家の跡取りを惑わしてしまった。心から謝罪する』
唇が震えてエクボの喉が開かない。
『誠司の遺産は全部、九下部家にお返しする。また、きちんと書面で謝罪文も送らせてもらう』
「待て、待ってくれ……っ」
ようやく開いた喉からは、エクボ自身も驚くほど掠れた声しか出なかった。
『俺は、霊幻の姓に戻ろうと思う』

「新隆、行くな……っ！」
悲痛なエクボの声に、少しだけ新隆は躊躇って。
『……さよなら、エクボ』
「新隆……っ！」
エクボは必死に言葉を探す。今、何としても引き止めないと、新隆が離れて去って行ってしまう。
「お前っ、九下部家から逃げられると思うなよ！お前は俺のものだ。必ず奪い返すからな……！」
『……呆れたな。師匠が嫌気がさすわけだ』
声が変わった。
「誰だテメェ」
『影山茂夫です。覚えてもらわなくてもいいです。できればあなたと話すのはこれきりにしたいので』
エクボは電話を持ち直した。
「随分なご挨拶だな。おまえさんの狙いはなんだ？新隆が相続した遺産か？いますぐ新隆をこちらへ返せば、そんな端金じゃなく、一生遊んで暮らせる金をくれてやるぜ」
はぁ、とため息が電話口から落ちてくる。
『お金なんか無くても、師匠と過ごせれば日々は楽しいんですよ。そんなことも分からない人たちに、大事な師匠を任せてられない。連れ戻して正解でした』
「……っそれは、そんなこと──！」
淡々とした声がエクボを焦らせる。
『こういうこと言うの慣れて無いので、上手く言えるか分からないんですが……ええと、力づくで取り返せると思わない方がいいですよ。僕たちの力は人智を超えています。くさかべけ？の力は通用しないと思ってください』
「は、くだらない脅しを……！」
『それでは、さようなら。師匠のことは忘れてください』
「待っ……！」
がちゃん、と電話は切れた。
エクボは青くなる。
「誘拐犯の狙いは、新隆本人だ……」

ぎり、とエクボが握りしめたスマホからミシッと悲鳴が上がる。
「取り返してくる」
絶望に息を呑んだ当主をヨソに、きっ、とエクボはおぼろげな少年の面影を睨み付けた。

※

スーツの青●で、目立つ女物の白大島紬をヒラヒラさせながら、そそくさと新隆はグレースーツを手に取る。
「取り敢えずこれなら外しはしないだろうし……」
新隆が暮らす当面の費用は芹沢から借りる事になった。
「どちらにしろ一度は九下部の家に行かないとな……」
新隆の顔は明るい。自由が新隆を照らしていた。
「師匠、決まりましたか？」
「ああ、これにしようかと」
「……！懐かしいですね」
着慣れたものが１番良い、と新隆は今更ながらに思う。
グレースーツに袖を通して。
九下部 新隆は、霊幻 新隆に戻るのだ。
「じゃあ、お会計を……」
「新隆！！」
がし、とまだ和服の新隆の腕を繋ぎ止めるように、渋蓬色の羽織に長着の男性が掴む。
「待ってくれ、行かないでくれ……！！」
「エクボ……！！」
想い人の顔を見て新隆の気持ちが揺れた。
「……よく、ここが分かったな」
「九下部家の情報網舐めるなよ……！さあ、帰ろう、新隆……！！」
だが、バチっとエクボの手は不可思議な力で弾かれた。
そして、ふわりとまた新隆の身体は宙に浮かび、エクボの手の届かない所にいってしまった。
「新隆……何が不満なんだよ、何不自由無い生活が九下部家にはあ

るじゃねぇかよ……！！」
浮かぶ新隆を守るように、茂夫が寄り添うように飛ぶ。
「……贅沢はさせてもらいました。でも、自由は無かった……気持ちの中でさえ」
きゅ、と新隆は手を握る。
「あなたに襲われても誰も助けてくれない。あなたを好きになっても幸せな生活は望めない。だって俺は誠司さんが好きなままなんですから。……そんな生活から逃げたくなった、俺を責めますか？」
エクボはかぶりを振る。
「責めねぇよ。本当に悪かったと思ってる。色々な。……もう無体はしねぇ。気持ちを確かめる事も。だから戻ってきてくれねぇか？」
「……悪い。俺を待ってくれてる人たちがいるんだ」
新隆は儚く美しく微笑む。
「お前にとって九下部家が大事なように、俺にも大事なものがあったんだよ」
エクボは俯いて唇を噛む。
が。
「──分かった」
決心して顔を上げた。
「俺は九下部家を捨ててお前についていく。お前の相談所を手伝ってやるよ。──俺にとって捨てられない大事なものは、お前だ、新隆」
新隆は驚いて絶句する。
「愛してる。金も権力も、家名も要らない。俺はお前のそばに居られればそれで良い。……そばに置いてくれないか？新隆」
「ほん、き、ですか？」
からりと笑って頷くエクボに新隆の指が震える。
「なあに、後継ぎなんていくらでも代えがきくもんだ。そもそも俺は九下部の本家から追い出されてた人間だ。そこまで九下部に未練はねぇよ。新隆、お前への未練に比べたら、ささいなことだ」
す、とエクボは手を差し伸べる。
「……俺も連れて行ってくれよ、そっちに」

誠司の影が。
新隆の中から消えていく。
「……モブ、ごめん、降ろしてくれ」
「……分かりました」
着地した新隆は、エクボに駆け寄ってその腕の中に飛び込んだ。
「ダメだ。エクボを九下部本家から取り上げる訳にはいかない。……俺にとっては、お義母さんもお義父さんも、大事な恩人ではあるんだ」
つうっと新隆は嬉し涙を流して。
「……ごめんな、モブ。俺は戻るよ。エクボと一緒なら、きっと、やっていけると思うから」
「師匠……」
エクボはしっかりと新隆を抱きしめ返す。
「……っ、大事にする……！」
「……当然です」
やれやれ、としっかりと抱き合った２人を見ながら、呆れたように茂夫が言った。

※※※Ｋパート※※※

その夜の褥は、実に熱に溢れたものだった。エクボの部屋で交わされた情交は密度高く濃く、常に密着して、口付けを終えることすらもったいない気がするほどに絡み合い、抱き合っていた。交わる吐息は唸りと喘ぎ。吐き出されるそれらがまるで霧となって立ち込めているようで、視界が霞んで涙に溶ける。
「は、あ、っぁ」
影山茂夫からの霊幻新隆奪還を完遂し、エクボは自身に宿る新隆への執着に思わず笑ってしまったほどだった。その執着の種類が「手篭め」ではなく、「愛情」からきているものだったからだ。本家邸宅に帰還後は寝込んでいた夫人や当主に心身ともに無事であることを説明、詫びをしっかり入れた上で通常生活へ戻るよう促して、二人は早々に手を取り合い、エクボの部屋にしけ込んだ、という状況

である。
もう何時間、こうして抱き合っているだろう。心の通わないまま何度も身体を重ねてきたことを思えば、感慨深いかもしれない。
エクボから与えられる刺激に身体を大きく震わせて、高く鳴きながら大きな絶頂の波を迎え、そのまま意識を手放した新隆を、エクボが優しく現世に引き戻す。目尻から涙をほろりと溢す紅潮した顔に、そっと手のひらで触れて愛おしげに撫でる。
「今言うと睦言と勘違いされるかもしれねぇが、本気だから聞いてくれよ」
頬を撫でる少しカサついた無骨な手が温かく、心地よさげに目を細めて、自分の手を重ねる新隆。
「うん」
短くも優しさの詰まった返事にエクボは少しホッとして、その潤んだ蜜色の瞳をしっかりと見つめて囁く。
「結婚してくれ、新隆」
新隆の左手を取り、誠司との結婚指輪が嵌められた薬指に深く口付けをする。
「一生俺様と一緒にいて欲しい」
その言葉には嘘偽りなど見えない、はっきりとした強い意志の感じられる力強い言霊が忍ぶ。一瞬驚いたように見開かれた蜜色がきらりと煌めいて、また美しい涙の雫を溢す。
「はい」
嬉しそうに赤らんだ顔がはにかんで、新隆の手がエクボの顔に伸びる。そのまま引き寄せられてまた、甘いキスを交わした。
「私・・・・・・いや、俺も、一生側に居させてください」
ちゅ、と重なった唇を離して、互いに照れくさそうに笑い合う。二人が初めて、お互いの意思を一方通行ではないことを理解できた瞬間だった。
見つめ合う瞳の中に、無言の会話が刻まれる。不思議と何を考えているのかがわかって、二人はおもむろに布団から起き出す。抱き合った汗が衣擦れの空気の動きに触れてほんのりと肌寒い。新隆は襦袢を、エクボは浴衣を上から簡易に羽織って、手を繋いでエクボの部屋を後にする。

廊下を撫でる、二人の足音。もうすっかり日も落ちて夜も更けた。
暗がりの中をひたりひたりと進んだ先には、新隆と誠司の夫婦部屋。襖の引手に手をかければ、さもあっさりとそれは開いた。
襖を静かに閉めて、月明かりが差し込む方へ進む。二人が足を止めたのは、誠司の仏壇の前だった。
裸に襦袢と浴衣を羽織っただけの、褥の香りを濃く漂わせる二人が仏壇を前にして立ち尽くす。そして新隆がゆっくりと唇を開く。その声すら、甘く色香を乗せて響く。
「誠司さん、俺、この人と結婚します」
少し震える声に、エクボが優しく肩を抱く。その感触が心地よくて、また涙が溢れて頬を伝う。だがこれは決して悲しみの涙ではないことは、新隆自身がよく理解していた。
「あなたのことも好きです。けど、ごめんね」
左手薬指に鈍く光る結婚指輪に手をかけ、するりと抜く。そしてそれを、笑う誠司の遺影の前に、コトリと置いた。
「エクボさんを、愛してる」
新隆の肩に触れるエクボの手に力が籠るのがわかった。
けじめである。これでひとつ、新隆の中で終わりを迎えた。
エクボもそれに続いて、遺影に静かに語りかける。
「俺様は新隆を、愛している。絶対に幸せにする。だからよ」
エクボは新隆に向き直ると、隠し持っていたものを取り出す。
新隆の新たな始まりのために。
「そこで見守っててくれや、兄貴」
解放された左手薬指に嵌められる、新たな契約の印である指輪。それは実にシンプルな作りの銀環だった。
「え、これ」
驚いたのは新隆だ。自分の左手を見て、いつの間に用意されたのかと混乱する。エクボがその様子を見て、照れ臭そうにくすりと苦笑した。
「とりあえず今はそれをつけていてくれよ。あとでちゃんとしたやつ贈るから」
「いっいやそんなにいら」
狼狽える新隆。まさかこのタイミングで貰うものとは思っていな

い。嬉し恥ずかしであたふたとしている、その時だった。

カタン。

音のした方を二人で見れば。
誠司の遺影が、まるで地面に顔を押しつけるかのように倒れていた。

新隆を頼む。

そう言われている気がして。
「・・・ありがとう、誠司さん」
倒れた遺影を拾い上げ、胸に抱きしめる。そんな新隆を、エクボが丸ごと上から抱きしめた。

エクボと新隆が結婚の意思を本家に正式に伝えたことで、雰囲気は一気に晴れやかなものとなった。夫人はもう新隆のことを息子と娘とどっちに見ているのだろうかと戸惑ってしまうほどに新隆に世話を焼き、当主は二人が妾以上の関係になったことを驚きながらも、エクボの身固めがやっと出来ると、こっそり胸を撫で下ろしているのだった。
何より体裁を重んじる名家の気質はなかなか変えられるものではないから、やはりまとわりつく視線や噂、分家やその他諸々の確執など気にしたらキリがないほど山積みではあった。しかし当主とエクボが一度牙を剥けば、嘘のように静かになるのだった。例の新隆に無体をしようとした分家の差金は、今は所在すら不明になっているが、その該当分家共々必要以上の制裁を受けたことは確かである。こういうのは、結局のところ金なのである。罰としてエクボの結婚祝金と称した財産剥奪をしたとかしないとか。
金はこうして金持ちの元を巡るのだ。

・・・・・・という話をエクボは新隆にしている。
新隆は自身が当事者とはいえ、エクボが話す九下部の大人の事情と

いうものを聞かされて、顔を青くしながらもおとなしく聞いていた。
誠司が話さなかった分だけ、エクボは不器用ながらも必要なことはしっかりと叩き込む。それが厳しい言葉であっても、生涯を共にするのなら避けては通れない道であると、色恋に塗れた甘い話ばかりではないのだと伝えた。
こんなに薄汚い血族の家でも籍を置くのならば、それに関わる人間として相応の覚悟を決めろ、と半ば脅しのように言われる新隆。
それでも。
「・・・・・・厳しいお言葉を、ありがとうございます」
そう言って丁寧に手を付いて礼を言うから。
「そんな真摯なあなただから、大丈夫だと、思いましたので」
顔を赤くして目を逸らして困ったように言うから。
「・・・・・・だめ、ですか？」
「上目遣いはやめろ・・・・・・」
「？」
早くそのままぐちゃぐちゃに犯してやりたくなる。
エクボはそんな欲を滲ませた顔に手を当てて、新隆の訝しげな顔に申し訳なくなるのだった。
だってその新隆は今。
「エクボさん？」
エクボの目の前にいる新隆は、純白の大振りの綿帽子をふんわりと被って、正絹の緞子織で流れるようななめらかさと光沢を宿す白打掛を見事に着こなしている。裾には大きく鶴の刺繍があしらわれ、それが光の加減できらりきらりと煌めいて彩るのだった。
ただでさえ白い肌が化粧を施され、また白地の着物で光をその肌にたっぷりと受けて、瑞々しく新隆の顔が輝いていた。睫毛に縁取られた蜜色の瞳はほんのりと潤み、頬に差した薄い紅が匂い立つようだ。そして、柔らかな唇に引かれた、目を奪う真紅。

こんなの、据え膳でしかない。

そう思えるくらいに下半身に血流が集まっているのを感じて、つく

づく自分の装いに感謝をする。
対するエクボは、黒五つ紋付羽織袴という出立ちだ。エクボの日焼けし黒くなった肌と彼の黒髪が、漆黒の羽織と長着と相まって引き締まり、差し色のように在する白の半衿と羽織紐が眩しい。さすが名家というだけありその紋は全て染め抜き紋になっており、格の違いを見せつける。そして筋肉質な身体を覆うその和装は肉体によく馴染んでおり、仙台平の袴の裾を払ってきびきびと歩く様子も本家の跡取りとしての風格を威風堂々と現すのだった。
そんなエクボが、白無垢で戸惑う可愛らしい新隆に手を差し伸べる。漆黒の袖から伸びる精悍な手首に思わず息を呑んでしまう新隆。
「そろそろ式の時間だな。行こうぜ」
「はい」
喜びに頬を染めて、紅のあしらわれた唇でふっと笑み、細い指がその手に触れる。

こんなの、抱かれたい以外になにが言える。

新隆は自分の装いに感謝していた。
純白で幾重にも着付けを施されたその豪奢な衣装の下で、新隆ははしたなく興奮していたのだった。
何度も言われた、顔に色気を出すなという無茶振り。今日は果たして大丈夫だろうか。
というよりも、神聖な婚姻の儀で、純潔をあらわす白無垢の下で、こんなにみっともなく勃起してしまう自分を恥じながら神前に向かう。悲しいかな、抑えようとすればするほどに襦袢が擦れて亀頭を刺激し、意に反してどんどんと漲ってしまうので、それを隠すので必死だった。綿帽子に礼を言おう。
頭の中が欲に塗れていくのを必死に叱咤しながら、新隆のために特別に水を入れられた三三九度の盃を交わす。誓詞奏上の儀で夫婦となる誓いの言葉を読み上げるが、その際にも下半身が気になって、変な声が出てしまわないかの気遣いで新隆の脳内はしっちゃかめっちゃかだった。

──こんなの神様に失礼すぎる。
本来ならもっと緊張しなければならないところを、と気を引き締めようとした。なんせ今日は来賓に茂夫や律、芹沢などの元相談所メンバーもいるのだから。
「では、結い紐の儀に移ります。お二方」
神主の厳かな声が静かに響いて、二人は向き合う。エクボの至極真剣な眼差しに、心臓がどきりと跳ねた。こんな顔も出来るなんて聞いてない、と新隆はいよいよ正気を失いそうになってまた気持ちを改める。
エクボの手が、白いリングピローに鎮座する水引きで編まれた紅の紐を手に取り、新隆の細い小指の根本にきゅ、と結び付けた。
「んッ」
その感触に思わずひくりと震え、息が漏れてしまう。はっとしてチラリとエクボを見ると、ポカンとしていたが、すぐにうっすらと口角をあげ、目を細めて小指の股をわざとらしくするりと撫で付けるのだった。
「・・・・・・ッ」
名残惜しげに離れる無骨な手を見送って、今度は新隆がエクボに結い紐をつける番だ。袖からたおやかにのぞく白く細い指が紅の色によく映えて、まるで新隆の指から流れ落ちる鮮血のように艶やかだ。
差し出されたエクボの男らしい手にため息をつきながら、小指に紐を滑らせる。緊張して震えてなかなか結べないのを、エクボが優しく笑って囁いた。
「大丈夫だ。ゆっくりな」
その声は安心材料でもあり、今の新隆にとっては媚薬でもあった。脳みそが甘く支配されていく中、ようやくエクボの小指に紅の誓いを結び終えたのだった。
心のうちに湧き上がる、深い感動。そうだ、結ばれるというのはこんなにも幸せに満ち溢れる心持ちだったのだと痛感して、鼻の奥が痛くなった。
神前に榊を奉納し、親族同士も盃を交わす。

新隆は、エクボの妻となったのだった。

※※※EntsCatパート※※※

無事にエクボと新隆の披露宴は終わった。会場となっていた大広間の出口で、当主と当主夫人、そして跡取りのエクボとその妻となった新隆が帰りゆく招待客を見送っている。
「師匠、本当にその……綺麗です」
どこかほんのり頬を染めながら茂夫が新隆を褒める。
「馬子にも衣装ってやつですね」
律がぶっきらぼうにそれに続いた。
「褒めてんのか？それ」
くす、と口元に手をやってたおやかに微笑う新隆の色気に、茂夫たちだけでなく、通りかかった親戚までもがどきっとする。
「しっかし、あの由緒正しい花嫁衣装も終わりだなぁ！男に着せちゃあなぁ」
ワザと聞こえるように分家の叔父が酔った声を上げる。
「跡継ぎだってどうするんだァ？」
「馬鹿だな、あの笑窪だぞ？もう妾の１人や２人居るに決まってるだろ」
「妾の子を跡継ぎにするのかよ！世間体の悪いこって……それなら妾を最初から妻にして、新隆を妾にすりゃあいいものを！」
かた、と新隆の手が震える。
さっとその肩をエクボが大丈夫だ、と言いたげに抱いた。
「祝いの席で俺の妻を大声で辱めるとは中々いい趣味をしてらっしゃる──環事叔父さん、輪栩叔父さん」
エクボの低い声で名前を呼ばれて、ビクっと叔父たちが飛び上がる。

『おぼえたぞ』

というエクボからの脅しだからだ。

「な、なぁんてな！いやあ、あの笑窪が早々に身を固めるとは、これで本家も落ち着くというものだ」
「いやあ、めでたい、めでたい！」
そそくさと叔父たちは帰っていった。
「師匠、今の話って……」
「ああ、悪いな、変な話聞かせて。忘れてくれ」
どこか表情が曇った新隆をまじまじと茂夫は見つめる。
「師匠、子供ができないことで何か問題があるんですか？」
「直球だな！？まあモブらしいっちゃらしいが……そりゃあ、エクボは九下部家の跡取りだ。ゆくゆくは当主になるんだから、跡継ぎがいないと困るだろう？……俺は、産んでやれないから……」
顔を更に曇らせる新隆の肩をギュッとエクボが抱きしめる。
「……跡継ぎのことは気にすんなって言ってるだろ。分家から養子を取ったっていいんだ。……俺が妾を取ることは無い。安心しろ」
「……ええ」
顔を曇らせる新隆に茂夫はきょとんとする。それから何か思い付いたように律と目を合わせ、後ろに居る芹沢や花沢とアイコンタクトを取った。
「分かりました。結婚祝いはそれにしますね」
「それ？」
「ふふ、内緒です」
にこにこと笑う相談所メンバーに新隆は首を傾げる。
「師匠が幸せになれるような贈り物ですよ！じゃ、また。準備が出来たら来ます」
相談所メンバーを見送って、新隆は息をついた。
招待客は茂夫たちで最後だった。
「お疲れ様」
客対応を続けていた新隆にエクボが優しく声をかける。
大広間は散らかっていたが、片付けはお手伝いさんの仕事だ。
２人は、自分たちの部屋へ戻る。
──夫婦の寝室へと変わった、エクボの部屋へ。

これから、初夜だ。

さぁ、と朱に染まっていく白無垢姿の新隆の頬を半歩後ろから眺めながら。

エクボは我慢しきれない、というように悪霊のように目口を半月型にして声を出さずに笑った。

──ここまで上手くいってくれるとは、と。

一年前。誠司が死んだ時、すぐさま当主もエクボも新隆を探った。もしや誠司殺害の為に送り込まれた何某かか、と疑ったのである。だが結果は白。びっくりするぐらい新隆はただ誠司を愛し、そばにいただけであった。
そうなってくると、新隆を九下部から手放すのは、当主も惜しがった。
特に新隆を手放したくなかったのは、当主夫人であった。

当主夫人は娘が欲しかった。

だからお家騒動の火種になると分かっていても、２人目を欲しがったのだ。だが２人目も男児。夫人には甘い当主も、さすがに３人目は許可しなかった。我が子が兄弟で争うのは、冷徹な当主とて極力見たくは無い。子供たちの扱いに差をつけるのも、当主がやりたくてやっていることでは無いのだ。それが増えるのは、当主とて耐え難かった。
それから夫人はずっと不満だった。もし誠司や笑窪に嫁が来ても、それは色々と叩き込まれたヨソの名家のお嬢さんだ。夫人の娘、というようなものでは無い。夫人に娘ができることは永劫無いのだ。と、思っていたのに。

嫁いできた新隆は、女としての心得は何も無い真っさらな『娘』であった。

夫人は喜び勇んで自分好みの教育を叩き込み、新隆をこっそり

『娘』として可愛がった。新隆が夫人のお下がりとして貰った着物は、実は夫人が新隆のために仕立てたものだったりもした。
年齢のこともあり、最近イライラしてヒステリックになりがちだった夫人は、新隆が来てから驚くほど柔和な優しい『母』となった。
それを当主が助かった、と思ったのは当然だった。夫人は九下部ほどではないにしろ、大きな名家の出である。機嫌が悪いと、当主はかかなくていい冷や汗をかくことになるのだ。
「あの子を手放したく無いわ」
誠司の死後、最初にワガママを言ったのは、実は夫人だった。
それには理由があった。
新隆は知らない、誠司が残した、いざという時のための遺書。

その、２通目が、問題だった。

それにはただ、新隆のことが書かれていた。その内容に夫人は口を尖らせていたのだ。
遺書の大筋はこうだ。
『新隆には、一切私の遺産を渡さないで貰いたい。彼は本来九下部には関係の無い人間である。１人で生きていく力のある、立派な成人男性である。私のワガママで、風切り羽根を切ってしまった金糸雀を、もし私が死んでしまったのなら、自由にしてあげて欲しい。
新隆は九下部のものでは無い。あくまで私の伴侶というだけであった。あの青空の似合う美しい金糸雀を、どうか自由に飛ばせてやってくれ。お父様、お母様、そして笑窪、どうか、どうか新隆を閉じ込めないでやって欲しい。
私が死んだら、新隆からは九下部の痕跡を消して、霊幻新隆として解放してやってください。お願いします。お願いします』
その遺書を、エクボたちはそれぞれの思惑で握りつぶしたのだ。

──死人に口は無く、手も足も出なかった。

当主夫人は、新隆という娘を手放したくないがゆえに。
当主は、ヒステリー気質のある夫人の機嫌を良くしておくために。

そしてエクボは、九下部に新隆をしばりつけて、手に入れやすくするために。

──そこからのエクボの動きは抜け目が無かった。誠司が死んでから、エクボはまず新隆の性格を探るために、懇意の金持ちたちに新隆を口説かせた。誰にも靡かなかったので、正攻法ではダメだと悟ったエクボは、操を破る方法を選んだ。強引に身体を暴き、まだ若い新隆の欲を刺激する。そして無理矢理男としてエクボを意識させるのだ。その方法は驚くほど上手くいき、新隆は今、エクボの前を白無垢で歩いている。

──まずは、九下部本家の人間にも気を付けろと、教えてやらないとなあ？

エクボは思わずくっと笑ってしまう。

でも。

「エクボさん？」

その声に振り返った新隆の目は、これから愛される期待に、とろりと潤んでいて。

その透き通った蜜色に、エクボの中のドス黒いものが瞬時に溶けて消え、新隆への純粋な愛しさが満たされていった。

「……行こうぜ。ここからは、『俺たちの部屋』だ」
「……はい」
羞恥に目を伏せる新隆のまつ毛が、廊下の薄明かりでキラキラと輝く。
綺麗だな、と思ったエクボは、突然雷に打たれたかのように、この人を守らねばならないという激しい想いに駆られた。
俺様はこの美しい金糸雀を、毒蛇はびこる九下部の岩屋に、一生閉じ込めてしまったのだから、と。

ああ。
美しい白百合が、九下部の家を浄化して歩いていく。
金にしか興味の無かった誠司は愛を知り。
我儘でヒステリックだった夫人は『娘』によって立派な母になり。
平和な家庭を知った当主は随分穏やかな性格に変わった。
そして新隆はコンプレックスの塊だったエクボのわだかまりを、凄まじい勢いで粉砕していっている。
嗚呼。
九下部本家をその高貴なる香りで満たしていく白百合よ。
本当は俺たちなんかが独占しちゃいけない人なんだろうな、とエクボは思う。
だが手放す気はさらさら起こらなかった。
「入ります」
エクボの部屋の引手に手をかけて、震える声で新隆がエクボに言う。
「もう挨拶はいらねぇよ。……お前さんの部屋でもあるんだから」
こくり、と新隆は頷いて、襖を開いた。
「あ……」
お手伝いさんが、エクボの布団の隣に、ぴったりと引っ付けて新隆の布団を敷いていた。
「おー、存分にどうぞ、って感じだな」
後ろ手に襖を閉めながらエクボがニヤついて言う。
「ふ、不束者ですが……」
「あー、それは式の前に聞いた。ま、明日から九下部としての振る舞い方ってのを叩き込んでやるから、覚悟しておけ」
ぐいっとエクボは新隆の手を引く。
その顎を掴んで、紅の引かれた唇に口付けようとして。
「……キスしていいか」
そう問われた新隆は目を丸くする。
「何を、今さら」
「……今日は結婚式だ。この唇は、誠司との永遠の愛を誓った唇だ。……そこに口付けてもいいのか、と訊いている」
さ、と新隆は目を伏せて、意を決したように瞼をくっきりと上げ

た。
「『死が２人をわかつまで』──」
そう言いながら、ぐいとエクボの後頭部に手をかけて引く。
唇を、柔らかく、深く、重ね合わせた。

誠司に誓った最後の操が、崩れ落ちた瞬間だった。

「──！」
エクボはたまらなくなって、かき抱いた新隆の羽織った白い打掛を、せわしなく肩から滑り落とさせる。
豪奢な刺繍を施された振袖の尻を、肉感を確かめるように揉み掴んだ。
「あ……っ」
少しみじろぎした新隆は。

自ら襟元をくつろげさせて、まろい肩と期待にピンと勃った乳首を露出させた。

「えくぼぉ……っ♡触って？」
思わずエクボは、誘う新隆を壁際に追い詰めて、襲うように乳首に吸い付いた。
「あ、ぁあ……っ！もっと乳首にいじわるしてぇっ♡ちゅうちゅう気持ちいいっ♡ん、あ、あ……！」
はーっ、はーっ、と獣のような息を漏らしながら、エクボはもう一つの乳首を爪でカリカリと柔らかく引っ掻いてやる。
「あ！ぁん、ゆびっ♡エクボの指好きぃっ♡カリカリきもち……あ、あ……っ、ぁあ……っ！」
ため息のような嬌声を漏らした新隆は、ぐい、と震える手で軽くエクボを押す。

今度は新隆は、すすすと右足を露出させながら、スカートを捲り上げるように、襦袢と振袖の左右の衿下をつまんで広げた。

すらっとした白い足に、淫液でぐちゃぐちゃの股間を、新隆は『見て』と露出してきた。

表情を控えめに隠す綿帽子から覗く瞳は淫らに濡れ、唇はエクボの唾液でぬらぬらと光り、自ら晒した胸は新郎にいじられて赤く色付く。そして衿下を摘んで露出した目に眩しい白い下半身では、淫液が内腿をつうっと垂れていった。

ここまで淫らに着崩された花嫁衣装も、そうそうないだろう。

「下もいじめてくれよ、えくぼ♡」

「……その言葉、後悔するなよ」
ごくりと生唾を飲み込みながらエクボは少し乱暴に新隆の性器を掴んで、ゴシゴシと容赦なく擦る。
「あっ♡あ、あぁ……っん、ぅん……ぇく、ぼ……♡」
トロンとエクボを見上げてくる新隆に応えるように、エクボは空いている手を新隆の後ろに潜り込ませる。
「カウパーでぐちゃぐちゃだな。手マンくらいならこのままいけそうだ」
「てまん……してっ……エクボのてまん大好き……♡……っあう！」
ぐぽ、と指を挿れられて、裾を広げる新隆の手が震えた。ぱさりと着物が落ちる。
「おい、いじめられたいんだろ。しっかり白無垢持ってろ」
「ん、ぅん……っ」
頷いて、震える指でしっかり衿下を握り直してたくし上げる新隆に、そんなにイジメラレたいのかよとエクボはクラクラした。
「あ！あ、あ、ン、ン……っ！」
性器を擦られながら内部を探られて、新隆の声が鼻にかかる。
「ぁんっ！そこ前立腺だからぁっ！ぐりぐりしないでぇ……」
「なんでだよ、気持ちいいだろ」
新隆はエクボの耳に唇をつけて、

「イくなら、えくぼの、チンポが、いい……♡」
と吹き込んだ。
エクボは性急に仙台平の袴を脱ぎ捨てて放り投げ、がっと新隆の左足を腕にかける。
対面立位だ。
「手を着物から離して俺の首に掴まれ。……挿れるぞ」
「うんっ♡」
ずぷ、と身体を犯す熱の塊に、嗚呼と新隆は喜びの声を上げた。
「きたぁっ♡すご、すごいっ♡えくぼ、えくぼぉ♡」
ゆさ、ゆさ、と持ち上げられてピストンされるたびに、白無垢の裾が引き摺られて揺れて、金糸雀の尾羽みてぇだと思わずエクボは呟いた。
「え、っ？な、に？」
「……なんでもねぇよ」
「あ、あ！」
ずん、と深く打ち込まれて、ぎりと新隆の爪がエクボに食い込んだ。
「エクボの、きもの、カッコいい……っ♡ずっと、抱かれ、たかった……っ♡」
はぁっ、と快感を逃す吐息を漏らしながら新隆が言う。
「俺だって、ずっと、抱きたかったさ……！……エロいんだよ、お前！」
「あん！♡」
ずぐ、と奥を捏ねるように穿たれて、甘い声を新隆は漏らす。
「えくぼ、の、えっち……♡」
「エッチなのはお前だこの無自覚魔性が！！」
ぎちぐちぎちゅ、とエクボのカウパーで濡らされていく新隆のオス穴が、卑猥な音を立てる。
「あ、ぁんっ、い、イイ……っ♡も、イきそ……っ♡」
「いいぜ、イっちまえ」
そう言われて、新隆はエクボの腰の動きに合わせて自分もゆさゆさと身体を揺らした。
「ぁっ♡ぁっ♡」

自分のいい所に当てているのだ。
その淫靡な動きにエクボも煽られる。
「ぃっ、イクっ……♡」
はふ、と息を吐いた新隆がぎゅっとエクボに抱きつく。
びくんびくんと身体を振るわせて新隆は快感を噛み締め、エクボを締め付けて搾り取った。
「……っは」
甘く力強くうねる内部に追い立てられ、エクボもまた欲を吐き出す。
（無理矢理犯した時とは大違いだ）
あまえてキスをねだる自分のお嫁さんに、エクボは言い難い達成感と満足感を覚える。
（こいつはもう、俺のものだ）
だが、身体を貫くのは狂おしいほどの愛しさ。
エクボはふと思う。こいつは男に生まれて良かったんじゃないか、と。どうも金持ちの趣味に合う性格をしている。女に生まれていたら傾国になっていたかもしれない。
「なぁエクボ、もっかいシようぜ。足りない……♡」
ゆさ、と結合部をゆすってくる新隆に、エクボはニヤリと笑って逸物を抜いた。
「初夜だからな。とりあえずコレで１人でイッてみせろよ。……そしたら嫌ってほどぶち込んでやるよ」
そう言ってエクボは黒檀の小さめの張り型を取り出した。
「これ……ッ」
自分の自慰の道具を取り出されて新隆はうろたえる。
「九下部家では嫁はソレで後ろをほぐすんだよ。さあ早くしろ」
エクボはニヤニヤしながら打掛を脱いで、自分の布団の掛け布団を剥いでどっかりと胡座をかいた。
「……っ、分か、った……」
新隆も白無垢の裾に気をつけながらも、掛け布団をどけて布団にM字開脚で座る。
「エクボ、俺が自分で上手にイけるか、見てて……？」
くぷ、と黒い張り型を、赤くぽってりと腫れたアナルの口に飲み込

ませながら、新隆は上目遣いにエクボを見上げる。
「ぐぅっ」
どぅん、と音を立てて胸に拳を食らったかのような衝撃をエクボは受けた。
「え、エクボ？」
「だから上目遣いはやめろって……」
「わ、分かった」
「いや駄目だやめるな俺様には見せろ」
「……？？何なんだよお前……っん……」
張り型が持ち手の部分を残してナカに入った。
「ぁ……ぁ……っ」
くぷくぷと張り型を手慣れた様子で新隆は動かす。
小さめの張り型は、ちょうど良くこりっ♡こりっ♡と前立腺を揉み弾いた。
「ん……ん、イ、きます……っ」
じわりとした快感を腰に感じながら、新隆はぴゅくっと精を吐く。
「──なんだぁ、そりゃあ」
エクボの笑い混じりの声に、はっと新隆は息を呑む。
恐怖半分、──期待半分だ。
「それじゃあ全然足りてないだろ？こんなちっちゃい張り型じゃあ、不埒な嫁御どのは満足できなかったみたいだな。──くくっ、この中から好きなのを選ぶといい」
エクボは押入れに隠していたAmaz●nの箱の中身を布団の上にぶちまけた。
グロテスクなバイブに、ピンクローター。大人のオモチャがズラッと並んだ。
「え……っ」
「どれもアナル用だ。ほら、早くしろ」
おずおずと新隆は大人しそうな見た目の黒いバイブを手に取った。
「これ……にしようかな」
「おー。じゃ、それでやってみせろ」
……引っかかった。エクボはほくそ笑む。見た目は地味だが、新隆の選んだバイブが、一番多機能で高価なやつなのである。

「一応ゴムしろよ」
「ん……」
パッケージを開き、新隆はのっぺりとしたバイブにコンドームを被せる。
ローションをかけて、ずぶ、とナカに導いた。
「ん……冷た……」
無機物の冷たさに思わず声を上げた新隆に、エクボは片眉を上げて、バイブのスイッチの一つを押してやる。
「しばらく経ったらあったかくなるから、それまで我慢しろ」
「う、ん……」
慣れないバイブを、白無垢の新隆がお腹を出したり引っ込めたりしながらナカに押し込んでいる。
（絶景かな、絶景かな。価千金とは小せえ小せえ──）
九下部 笑窪なら億金出す、と密かに思って愉しむ。
「入っ、た、と思う……」
「ん、ならスイッチ押してみろ」
「う、ん！？」
ブイン、とバイブのスイッチが入った。
「あ、ああ、へん、な、感じ……っ」
「他のスイッチも全部押してみろ」
新隆は震える手で、ぱち、ぱちとスイッチを入れる。
「ああぁあっ！？」
ぐいんと動いたバイブは前立腺を押し上げて。
全自動のピストンが前後に前立腺をごりごりと擦って、新隆の結腸を叩いた。
「何これぇっ、すご……っ！」
新隆はバイブから与えられる快感に夢中になる。
「ぁ、あっ♡ヤバいっ♡」
最初はニヤニヤしながらそれを眺めていたエクボだが、だんだん面白く無くなってきた。
「や、ん……っイく……っえ！？」
エクボはピンクローターを手に新隆に近づく。
「ちょっ、やめっ、」

ニヤリと笑ってエクボは、振動するローターを新隆の性器の先端にぐりっと押し当てた。
「あ――――――――っ♡♡♡♡」
びゅるるる！と勢いよく新隆は射精する。
強すぎる快感に新隆の足ががくがくと震えた。
「なんで……ひど……」
「１人で気持ち良くなってんじゃねーぞ」
「エクボがオナニー見せろって言ったんだろ！？」
「……このバイブ、押入れにしまっておくけど、１人で使うなよ？使う時は必ず俺様に見せろ」
「……！！」
新隆の後ろから引き抜いたバイブを目の前で見せつけながらエクボが言う。
「……分かったよ、ヤキモチ焼きめ」
ちょっと恥ずかしそうに新隆は目を逸らした。
「俺から目を逸らすな」
突然真剣な声でそう言われて、おずおずと新隆はエクボと目を合わせる。
「俺を見ててくれ」
「……うん」
エクボは白無垢の裾を綺麗に布団に広げ、着物の帯だけを外して新隆を布団に横たえさせる。
「綺麗だ」
そう言って新隆に馬乗りになり、口付けた。
「ん……ん、んぅ……っ」
口付けを深めながら腰を揺らすと、エクボと新隆の性器が擦れ合う。
「ぁ……ん、えくぼ、せつない……っ」
ぷは、とキスから逃げて新隆が甘い悲鳴を上げた。
「あ？何がだよ」
「おなか、せつないって……オモチャじゃ全然満足できない。えくぼのが欲しい……っ♡」
新隆の腕や足がエクボに絡みついてくる。

「欲張りな嫁さんだなぁ……！」
エクボは悪そうに笑って、新隆の両足を持ち上げた。
「オラっいっぱい食べろ！！」
「ん゛、お゛っっっっ♡」
ズドン、と深く挿入されて、きゅううと新隆の足の指が丸まった。
「すごっ♡俺ん、ナカ、全部えくぼで、埋まってるぅ……っ♡♡」
「……っく、もっと緩めろよ……！！」
パン、パンと肉と肉がぶつかり合う音が響く。
「あ゛あ゛っ♡イ゛イ゛よぉ゛っ♡♡♡」
「そりゃあ何より……っ！！」
同時にずちゅ、ぐぼっと中出しされた後口からエクボの精液が溢れて垂れて、尻たぶに痕を残していった。
「えくぼぉっ♡好きぃっ、好き……っ♡」
「あ゛！？チンポがか！？」
激しい抽挿にガタガタと襖が揺れる。
「っあ゛ん♡いじわるぅっ♡チンポも、セックスも、」
ごり、と前立腺に激しく抽挿される亀頭があたって、ひうっと新隆は喉を鳴らした。
「優しいとこも、いじわるなとこも、全部好きぃっ♡っん゛♡」
シーツを掴んだ新隆の足が宙を蹴ってぴくぴくと震える。
「新隆……っ」
「あっ♡あっ♡あっ♡♡♡おっきいの来るぅっ♡えくぼぉ……っ♡♡♡♡」
ぎく、と新隆の脚が強張って、その後じわじわと弛緩する。深イキしたのだ。
「……っく」
ちゅ、ちゅ、と吸い付いてくるような壮絶な内部に促されるまま、エクボは自分の名前を呼んで果てた、愛しい人を抱きしめてイった。
「えくぼ、すきぃ……♡」
まだ絶頂の波から降りて来れない新隆は、余韻のままにエクボの涙袋に柔らかく口付ける。
「……俺もだ、新隆」

エクボは新隆の手を取って。
「愛してる」
その甲に、優しく口付けた。

※

とある政治家のパーティーにて。
「今日は面白いのが来てるらしいぞ」
「何でも九下部の跡取りの男嫁だとか」
「へぇ……どうやってあのお堅い家に取り入ったのかね」
興味を持った男が、九下部の分家の男たちと談笑している、女装をした新隆に話しかけた。
「こんにちは、九下部のお嫁さん」
「こんにちは、根雅寸さん」
──名乗っていない。
根雅寸はたらりと冷や汗を流した。
新隆は社交界デビューの前に、エクボと当主に要人の名前と顔をあらかじめ叩き込まれていたのだった。
「九下部 新隆と申します。以後お見知り置きを」
「あらたか……覚えました。よろしく」
握手をして、そのさらりとした肌の手触りに根雅寸は息を呑む。
華のような美しさを持った、妙な色気のある青年だった。
「どうですか、あちらで夜風に当たりながら、少しお話ししませんか」
くすりと笑う新隆の目元に、下心をもよおした根雅寸は惹き込まれる。
「ごめんなさい、そろそろ夫と挨拶回りに行かないと。では、九州のこと、応援しております」
バッと根雅寸は新隆の顔を見て固まる。持ち会社が、九州に工場を建てることはまだ内密にしているはずだった。
「……さすが腐っても九下部、食えないな」
新隆はエクボから贈られた鳳凰の帯をきりりと締めて、高価な着物に負けない艶やかさをその容貌から放っている。

凛として立つ新隆は、九下部の華として、社交界で立派に咲き誇り始めていた。

後編に続く